みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

他者の幻想、自己の内観：驚異譚をめぐる比較研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山中, 由里子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4892

評論 展望

他者の幻想、自己の内観
――驚異譚をめぐる比較研究

文・写真 山中由里子 やまなか ゆりこ

民族文化研究部准教授。専門は比較文学比較文化。単著『アレクサンドロス変相：古代から中世イスラームへ』（名古屋大学出版会 2009年）が、島田謹二記念学芸賞、日本比較文学会賞を受賞。編著に*Arabian Nights and Orientalism: Perspectives from East and West*（I.B. Tauris 2006）。

驚異譚とは？

人間の根底には、未知なるものに対する好奇心、畏怖、憧憬、知識欲、収集欲があり、珍しい不思議なもの・現象を説明し、可視化しようとする心の動きがある。この欲求は異なる文化圏において種々様々な「異形」として結晶を結び、それは時代とともに移り変わってきた。その類似性あるいは多様性は、われわれ自身の好奇心を刺激してやまない。

中世ヨーロッパでは、辺境・異界・太古の怪異な事物、生き物、あるいは現象についての逸話はラテン語でmirabiliaと呼ばれ、それがフランス語ではmerveilles、英語ではmarvelsとなった。いっぽう、中世イスラーム世界においては、未知の世界の摩訶不思議を語るこのようなエピソードは、アラビア語、ペルシア語で‘ajā’ibと呼ばれる。「ミラビリア」も「アジャーイブ」も、いずれも「驚異、驚異的なもの」（複数）を意味する。現代の研究者はこのような語りを「驚異譚」、「驚嘆文学」と呼ぶ。

ヨーロッパの「ミラビリア」と中東の「アジャーイブ」は、言葉の意味が共通しているだけでなく、多くのモチーフも共有している。たとえば、動く島、女人国、犬頭の民、動物あるいは人のなる木、信徒の世界を脅かす夷狄ゴグとマゴグなど。これらの多くは「アレクサンドロス物語」や、ユダヤ教・キリスト教・イスラーム教の宗教説話、あるいは「千夜一夜物語」などの普及を通して、古代世界から中世・近世に継承されたものであり、中東およびヨーロッパの博物誌、地誌、歴史書、物語、旅行記・見聞記といった様々な種類のテクストに登場する。つまり、種々のモチーフを共有しているだけでなく、この世の驚異を集め、書物のかたちに（時に挿絵入りで）編纂するという行為にも、中東とヨーロッパでは共通性が見られるのである。

なぜこのように似た現象がみられるのか、あるいはどこが違うのかという疑問が出発点となり、私はあらためて驚異譚に関する比較研究を始めることにした。

驚異譚研究の蓄積

中世ヨーロッパの驚異譚もしくは想像世界に関する欧米の研究にはかなりの蓄積がある。たとえばフランスのアナール学派の中世史家ジャック・ル＝ゴフの『中世の夢』（池上俊一訳、1992年）や、美術史家バルトルシャイティスの『幻想の中世』（西野嘉章訳、1998年）や『異形のロマネスク』（馬杉宗夫訳、2009年）などは本課題に関連する代表的な研究であるといえよう。とくにル＝ゴフによる中世ヨーロッパの「驚異」の類型化は、比較のための枠組み作りにたいへん参考になる。また、邦訳はないが、ロレーン・ダストンとキャサリン・パークの共著『驚異と自然の摂理――1150年－1750年』（Daston and Park 1998）は、中世から近世にかけてのヨーロッパにおける「驚異」の在り方の時代的変遷とその歴史的文脈を大きく捉えている。中東における驚異譚の歴史的展開と比較するにあたって参照すべき研究である。

日本の研究者の著作の中でも、彌永信美の『幻想の東洋――オリエンタリズムの系譜』（1987年）や樺山紘一の『異境の発見』（1995年）などは示唆に富む。また、池上俊一は講談社学術文庫において「西洋中世奇譚集成」というシリーズを監修しており、本研究にとって重要な中世ヨーロッパの驚異譚の諸作品の翻訳を着々と進めている。池上自身の大著『ロマネスク世界論』（1999年）は、中世ヨーロッパの心性・感性・想像界が驚異を生み出す、その心的メカニズムを解明しており、ル＝ゴフの研究とともに、本研究にとって非常に重要な方法論的指標となる。

いっぽう、中東地域に関していえば、フランスのアンドレ・ミケルによる中世ムスリムの人文地理についての大著『イスラーム世界の人文地理――11世紀半ばまで』（Miquel 1967-1988）がある。国内では、大阪大学の竹田新によるアラブ人文地理学に関する一連の研究や、杉田英明による個別の説話やモチーフの東西伝播に関する詳細な論考が本研究のテーマに深く関連している。守川知子は、ムハンマド・

ブン・マフムード・トゥースィーによる『被造物の驚異と万物の珍奇』というペルシア語の百科全書作品を翻訳する作業を数人の若手研究者とともに進めており、『イスラーム世界研究』に連載中である。その成果は本研究を遂行するにあたって不可欠な資料である。

フランスでは興味深い展覧会も過去に開催されている。たとえば、ルーブル美術館で2001年に開かれた「イスラームの地の不思議と驚異」*L'Etrange et le merveilleux en terres d'Islam*は、イスラーム世界の美術品（細密画、陶器、金属器）に描かれた異形の表象を展示したものであった。

驚異の深層

このように、ヨーロッパ文学および中東文学のそれぞれの分野においては、これまでにも異形・異境に関する研究は国内外において行われてきているが、従来の研究のほとんどは「西洋から見た東洋像」、「西洋中世の想像世界」、あるいは「中世ムスリムの世界観」などの抽出に留まっている。文化圏の相互交流をダイナミックに捉え、中東とヨーロッパにおける驚異譚の古代・中世・近世にかけての大きな展開を比較し、俯瞰しようとした研究は、日本国内のみならず海外においてもこれまでにあまりない。筆者が知る限り、唯一例外として挙げられるのが、フランスのイスラーム専門家がル＝ゴフなどと協力して中東とヨーロッパの中世驚異譚の比較を試みたシンポジウムの報告書『中世イスラームにおける不思議と驚異』（Arkoun et al.（eds.）1978）である。

驚異のイメージの底にある「地域の無意識」ないし「文化（社会）の無意識」（池上 1999：18）は、池上が言うように流動的で曖昧である。しかし、通時代、通文化的に驚異の表象を比較すれば、それぞれの文化圏、あるいは時代の心的世界の特性が浮かび上がり、その輪郭をより明確にすることができるのではないかと考える。そして中東とヨーロッパの比較心性史を構築するには、驚異譚は格好のテーマである。さらに東アジア文化圏に帰属する日本人としてわれわれは、複眼的な視点からこの問題に取り組むことができるため、「文化の三角測量」によって驚異の深層により近づくことができるはずである。

たとえば、冒頭で述べたように中東とヨーロッパにおける驚異譚にある程度の共通性があるとしたら、中国の『山海経』あるいは『日本霊異記』のような「怪異譚」とは、どう違うのか。西洋史における「驚異」と日本史における「怪異」の比較研究の有効性は、東アジア恠異学会の黒川正剛が提言しているが（2003；2009）、具体的にはいまだ究明されていないようである。ちなみに、「驚異」という言葉自体は、明治期以降に西洋語の訳語として定着したものと考えられる。明治の国語辞典、たとえば高橋五郎の『いろは辞典』（明治21年）や大槻文彦編の『言海』（明治22年）には「怪異」という語はあるが、「驚異」はない。いっぽう、津田仙等がロプシャイドの*Dictionary of the English, Chinese and Japanese Languages*から翻訳した『英華和譯字典２巻』（明治14年）には「Wonder 出奇、詫異、駭異、怪異、奇異、驚異」、「Marvel 出奇、奇、奇之、詫異、奇異」、「marvellous stories 怪談、バケモノバナシ」などとある。ついでに、和田垣謙三等編『哲学字彙』（明治14年）には「Wonder 驚駭、愕貽」とある。

日本人独自の立ち位置をこのように意識しながら眺望すると、「そもそも人はなぜ驚異を語りたがり、集めたがるのか」という根源的な問いに、これまでにない角度から光をあてることができるはずである。

驚異の分類

さて、驚異譚の想像と語りのメカニズムを比較し、宗教・言語・文化・時代的な特異性と超域的な包括性を抽出するには、まずは、驚異譚というジャンルの枠組をある程度画定する必要がある。ただし、ジャンルの厳密な定義をし

図1 ゴグとマゴグの防壁の建設をするアレクサンドロス。フィルダウスィー『王書』、大モンゴル版挿絵1330年頃（*Alessandro Magno. Storia e Mito*, Milano: Leonardo Arte, 1995, plate 130b）。

て、境界線の中か外かと議論するわけではない。むしろ輪郭のはっきりしない「磁場」のようなものと捉え、「驚異譚」という磁場の中心に位置づけられ、ミラビリアおよびアジャーイブに明らかに分類される主要な著作を選定することから始める。手始めに、前者の一例としてはティルベリのゲルウァシウスの『皇帝の閑暇』（1209-1214）が、後者の例としてはガルナーティー（1080-1169/70）の『精髄の贈り物と驚愕の精粋』が挙げられるが、これらを綿密に分析し、その言説の語り手（あるいは編纂者）が、なにを意図し、どのようなタイプの情報を集め、どのように整理し、誰に向けて伝えているかということを明らかにしなくてはならない。そこから驚異譚の神髄のようなものが見えてくるはずである。

考察の対象となる驚異譚を含む書物は、旅行記、地理書、博物誌、宗教書など多岐にわたるが、さらには、驚異譚という強力な磁場には、テクスト以外の媒体に表象された図像も引き寄せられてくる。中東においてもヨーロッパにおいても関連写本の多くは驚異を視覚化した挿絵に彩られているし（図1）、「ヘレフォード地図」や「エプストルフ地図」のような世界地図（ラテン語でmappae mundi）には、辺境の驚異が描きこまれたものもある（図2）。寓意と化した驚異譚はヨーロッパの教会の建築装飾などにも表れる（図3）。

こうして、素材が選定されてきたら、比較研究のための基本的な共通項を設定する。驚異譚がいかに機能しているか――信仰の強化、知識の探求、純粋な娯楽、行政・統治――という問いは、一つの有効な問題設定であろう。加えて、議論のプラットフォームとして興味深いのは、トポグラフィーの問題である。たとえば、驚異譚に表れる境界意識、特定の場所とイメージの相関関係（インド、中国、マグリブ、アフリカ、大洋、天国・煉獄・地獄、遺跡・碑文）、異境・異界へのアクセス（アレクサンドロス、プレスター・ジョン、マルコ・ポーロ、ジョン・マンデヴィルのような大旅行家、夢、天使、魔術、人工装置）などが、テーマとして浮かぶ。

図1の部分的拡大

図2 エプストルフ地図再現図。ドイツ、エプストルフ1300年頃(1943年焼失)(Wikipedia Commons)。

驚異の伝播、驚異の進化

筆者自身はこの研究の枠組みにおいて、アレクサンドロス大王にまつわる驚異譚の伝播の過程を明らかにするつもりである。アラブ・ペルシア文学においてアレクサンドロスは、既知の世界の境界を越えて、通常の人間が辿り着くことのできない異界を探訪した太古の偉人という一側面をもつ。陽の昇る処、陽の沈む処、ジブラルタル海峡やセレンディーブ(セイロン)といった「この世の果て」をもさらに越え、暗闇の国、天空、海中などに遠征したとされている。この間に彼が見た不思議な動植物(人間の頭のなる木など)、出会った奇異な民族(ゴグとマゴグ、犬頭人、人魚など)の描写は、当時の読者の博物誌的な好奇心を満たすものであり、イスラーム教が拡がった地域の人々の世界観を表すものであった。これらのエピソードの多くは、古代アレクサンドリアに起源があるとされる「アレクサンドロス物語」にさかのぼり、類似した逸話は西アジアだけでなく中世ヨーロッパにも伝わっていった。権力の移行、人間の移動、書物・視覚イメージの普及など、知識の伝播の歴史的文脈を把握した上で、アレクサンドロスの探究者としてのイメージがどのように普及したかを明らかにしたい。

アレクサンドロスと関連した驚異譚的モチーフの伝播の例として興味深いのは「女人国」伝説である。ギリシア語の「アレクサンドロス物語」には、アレクサンドロスが母オリュンピアスに宛てた書簡が挿入されているが、そこには東方遠征の際に「アマゾンの国」を訪れたことが報告されている。アマゾンとは、いうまでもなくギリシア神話に登場する、女戦士の集団である。子をもうけるために、年に数日のみ男と交わる以外は、男なしで生活するという勇ましい女たちの部族の話は、英雄ヘラクレスの偉業と関連して語られ、またホメロスが『イリアス』において描いたトロイア戦争にも登場する。しかし西アジアへはおそらく「アレクサンドロス物語」を介して伝播したのではないかと思わ

れる。ディーナワリーが9世紀にアラビア語で記した世界史『長史』や、フィルダウスィーが記したペルシア語英雄叙事詩『王書』(1010年)など、「アレクサンドロス物語」の影響を受けていることが明らかな作品にはアレクサンドロスが女ばかりの国を訪れたエピソードが含まれている。しかし同時に、「アレクサンドロス物語」とは独立して流布していた形跡も、たとえばボゾルグ・イブン・シャフリヤール『インドの不思議』(10世紀後半)や 前述のガルナーティーなどのアラビア語地理書に見られる。これらでは女だけの地は、船乗りが遭難する南海の孤島であったり、マグリブ地方の砂漠であったりと一定ではないが、地理的に周縁的な位置にあることは共通している。『嶺外代答』(12世紀)や『諸蕃誌』(13世紀)といった中国の地理書にも、アラブの地理書とある程度類似した女人国の記述がある。これらを詳しく比較し、ギリシア、西アジア、インド、中国、東南アジアの間の伝説の往還を探らなければならない。

さらに国内外の研究者との共同作業によって、最終的には驚異譚というジャンルの進化の過程を文明史的に大きく捉えたい。古代ギリシアの博物誌にはすでに驚異譚的な話が多く含まれており、博物誌の副産物的なジャンルとして紀元前3世紀頃に生まれた「パラドクサ」(英語ではparadoxography)はミラビリアの前身であるともいわれる。これが驚異譚の黎明期だとしたら、「黄金時代」ともいえるのは、中東においてもヨーロッパにおいてもおそらく11世紀から13世紀頃であろう。そしてその後の中東においては、このジャンルの新しい展開はほとんどみられないのに対して、中世から近世へと移行するヨーロッパにおいては、言説や絵画で表象された驚異を書物に編纂するという行為が、実際の「モノ」としての驚異を集め、分類し、陳列するという行為へと発展してゆく。大航海時代の到来とともに、古代の遺物や異境の珍しい品々を集めて陳列した、いわゆる「驚異の部屋」(英語でcabinet of wonderまたはcabinet of curiosities、ドイツ語でWunderkammer)が、ヨーロッパ各地に登場するのである(図4)。言説や美術の中の驚異でなく、驚異の実物との出会いを提供するこのような珍品陳列室は、現代の自然・考古学・民族学博物館の原型ともいえ、また、万国博覧会、動物園へとも発展していった。

図3 アレクサンドロスの昇天。イタリア、オトラント大聖堂モザイク細部、1166年(Grazio Gianfreda, *Il Mosaico di Otranto: Biblioteca Medioevale in immagini*, Lecce: Grifo, 2005, 166)。

展望・野望

このように、驚異譚は近代の自然科学、人類学の登場を促したといっても過言ではないかもしれない。しかし近代的な理性は、驚異を「オ

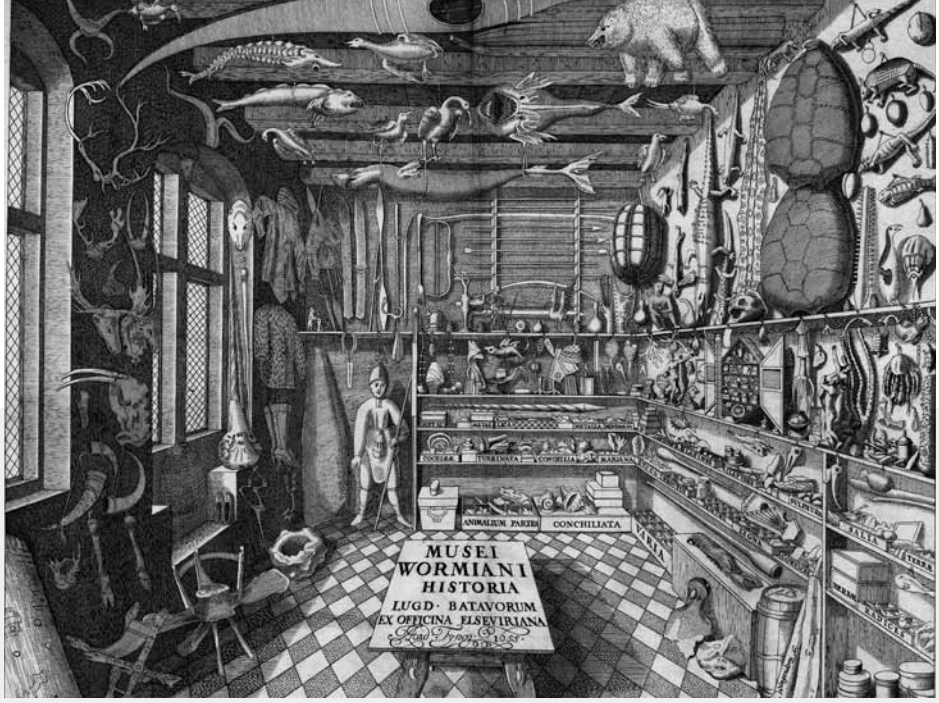

図4 オレ・ヴォルム（1588-1654）の「珍品陳列室」。ヴィルム・ヴォルム編『ヴォルム博物館』（1655）口絵
（ストラスブール大学 Digital Old Books, Document H317 http://imgbase-scd-ulp.u-strasbg.fr/）。

カルト」、「好事家の収集癖」の範疇に閉じ込めてきた。また、情報は溢れているにもかかわらず、他者に対する好奇心はむしろ萎え、想像力が働かなくなってきているようにも感じる。だからこそ本研究は、人間精神の根源的な部分にある「驚き」と「好奇心」を呼び覚ますようなものでありたい。

以上が驚異譚プロジェクトの青写真である。個人で成し遂げるには無謀な計画かもしれないが、この夢を実現するために、筆者は2010年度より科学研究費補助金（基盤B）「中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究」を立ち上げた。本研究には西洋古典文学、西洋中世文学、西洋近世史、中世・近世中東史、比較文学といった異分野の専門家が参加しており、熟練した名匠と有望な若手が揃ったドリーム・チームであると自負している。特定のテーマを通時代・通文化的に広く探求する比較文学者と、特定の時代と地域を掘り下げる歴史学者という、思考回路の異なる研究者同士のコラボレーションは、双方にとって新鮮な刺激となるだけでなく、複雑に絡み合うヨーロッパと中東の精神史の展開を、相対的かつ正確に捉えることを可能にするはずである。「西洋が見た東洋」といったような一方通行的な視線をイデオロギー的に批判することにこだわるオリエンタリズム批判の域を出て、「他者の幻想」を正視すれば、そこに「自己の内観」が鏡像となって映し出されていることに気づくだろう。

【参考文献】

Arkoun, Mohamed, J. Le Goff, T. Fahd and M. Robinson (eds.) 1978. *L'étrange et le merveilleux dans l'Islam médiéval: actes du colloque tenu au Collège de France à Paris, en mars 1974*. Paris: Editions J. A.
バルトルシャイティス，J. 1998『幻想の中世』西野嘉章訳 リブリポート。
―― 2009『異形のロマネスク』馬杉宗夫訳 講談社。
バリング=グールド，S. 2007『ヨーロッパをさすらう異形の物語 中世の幻想・伝説・神話（上・下）』池上俊一監訳 柏書房。
Daston, Lorraine and Katharine Park. 1998. *Wonders and the Order of Nature: 1150-1750*. New York: Zone Books.
Gharnaṭī, Abū Hāmid. 2003. *Tuḥfat al-albāb wa-nukhbat al-i'jāb*. Abu Dhabi: Dār as-Suwaidī.
―― 1925 Gabriel Ferrand (ed.) Tuḥfat al-albāb wa-nukhbat al-i'jāb. *Journal Asiatique* 207: 1-148, 193-332.
―― 1985 G. Ducatez (trans.) La Tuhfa al-Albâb d'Abû Hâmid al-Andalusî Gharnâtî. *Revue des Études Islamiques* 53: 141-241.
池上俊一 1999『ロマネスク世界論』名古屋大学出版会。
逸名作家 2009『西洋中世奇譚集成　東方の驚異』池上俊一訳・解説 講談社学術文庫。
彌永信美 1987『幻想の東洋――オリエンタリズムの系譜』青土社。
樺山紘一 1995『異境の発見』東京大学出版会。
黒川正剛 2003「西欧近世における〈怪異〉　驚異と神について」東アジア怪異学会編『怪異学の技法』臨川書店。
―― 2009「西洋中世史研究と怪異学――前近代史の共通言語を目指して」東アジア怪異学会編『怪異学の可能性』角川書店。
ル＝ゴフ，ジャック 1992『中世の夢』池上俊一訳 名古屋大学出版会。
Miquel, André. 1967-1988. *La géographie humaine du monde musulman jusqu'au milieu du 11e siècle*. 4 vols. Paris: Mouton.
Musée du Louvre. 2001. *L'Etrange et le merveilleux en terres d'Islam*. Paris: Réunion des musées nationaux.
修道士マルクス、修道士ヘンリクス 2010『西洋中世奇譚集成　聖パトリックの煉獄』千葉敏之訳 講談社学術文庫。
杉田英明 2009「動く島の秘密――巨魚伝説の東西伝播」『東京大学大学院総合文化研究科・教養学部外国語研究紀要』14：1-35。
ティルベリのゲルヴァシウス 2008『西洋中世奇譚集成　皇帝の閑暇』池上俊一訳 講談社学術文庫。
トゥースィー，ムハンマド・ブン・マフムード 2009-2010「被造物の驚異と万物の珍奇（1，2，3）」守川知子監訳 ペルシア語百科全書研究会訳注『イスラーム世界研究』2（2）：198-218；3（1）：403-441；3（2）：378-391。